

基礎・境界 ソサイエティ

ニューズレター

September 2006 No.58



The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers

ソサイエティ会長就任の挨拶に代えて

坂庭 好一（東京工業大学）

1. はじめに

築山前会長の後任として、平成 18 年度の基礎・境界ソサイエティ会長を仰せつかりましたが、既に相当の耄碌爺に成り果ててしまっており、どれだけお役に立つことが出来るのか、不安でなりません。幸い幹事の皆様をはじめとして、運営委員会のメンバーには多くの有能な方々に就任頂けましたので、会長が下手に手出しをしないことが一番かも知れないと思ったりもしております。

2. 会員の減少問題

今年は電子情報通信学会の第 80 回の総会が開催された区切りの年であり、その総会における伊澤新会長の挨拶(レクチャー)はなかなか興味深い内容を含むものでありました。まず言及されたのは最近の会員数の減少問題でした。図 1 は最近 5 年間の会員数の変遷を示したものです。一時 4 万人を越えた会員はその後減少の一途を辿り、後述の図 3 から分かりますように、現在では昭和の末の頃に戻っております。これは少子化による人口の減少を遙かに上回る急激な減少割合を示しております。この



傾向は本学会に限ったことではありませんが、大きな問題の一つであることには間違いありません。政府や文部科学省の(何も考えていないのではないかと疑いたくなるような)アメリカ追随主義に大きな誤謬があるような気がしてなりません。不平不満ばかりを述べていても仕方ありません。まずは基礎・境界ソサイエティとして出来る努力をしていくべきであろうと思います。

目次	ソサイエティ会長就任の挨拶に代えて <坂庭 好一（東京工業大学）>	1
	ニューズレター投稿のご案内	4

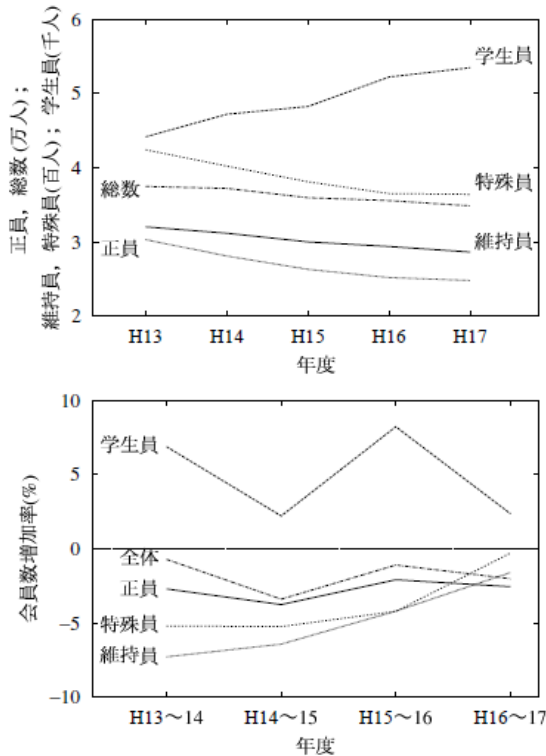


図 1: 本学会会員数の最近の推移

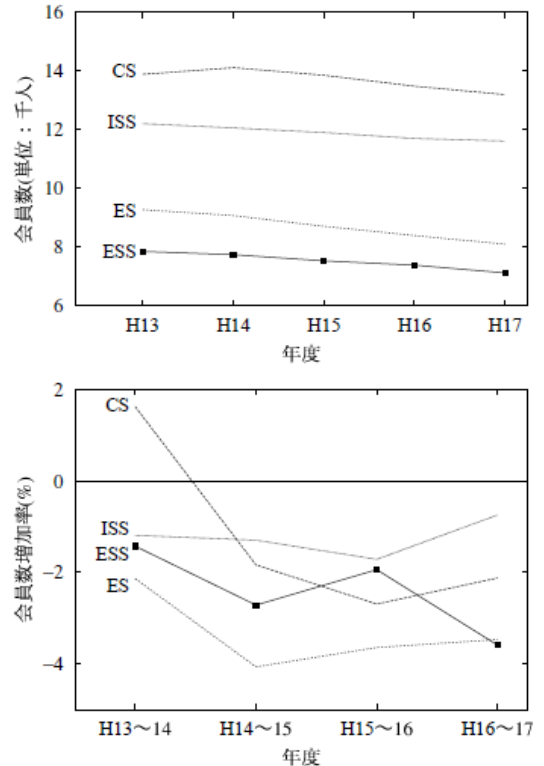


図 2: 各ソサイエティ会員数の推移

伊澤新会長も指摘されたことですが、図 1 の中で学生員の数だけは増加しています。これは大変面白い材料と見えますが、事務局のお話ですと、定着率の面で大変不安定であり、量的にも正員の減少率の大きさには簡単にかき消されてしまう心細い状況のようです。

図 1 で注目すべき点に、維持員(サポートメンバ)、特殊員(図書館等)の大幅な減少もあります。企業等の業績が上向きになりつつある現在、学会本部として一度再加入のお願いをしてみるべきではないかと感じます。

学会全体の会員数が減少していることは各ソサイエティの会員数も概ね減少していることを意味します。図 2 は同じく最近 5 年間のソサイエティ毎

の会員数の変遷を示したものです。基礎・境界ソサイエティは 4 ソサイエティの中では元々最も小さなソサイエティですが、平成 16~17 年度の会員減少率においてトップであったことは大きな心配の種ではあります。

東京支部は、昨年その定款を変更して、若い会員の増強を支部のミッションとすることを宣言しております。基礎・境界ソサイエティとしては、基礎・境界分野に関わる講演会や講習会の開催を東京支部と協力するような形で推進し、高校生などを含めて電子情報通信分野の面白さとそれが日本を支える基盤技術であることをアピールし、若い会員の獲得に努力するなどの活動を進めることが考えられるのではないかと、思います。

3. 基礎・境界ソサイエティの基本理念

電子情報通信学会では常に学会が内包する問題点を検討し、それを改善する方策を探索して弛まぬ前進を行なって参りました。現在のソサイエティ制も昭和の時代から検討された改革で、移行期としてのグループ制(現在のグループではなく、現ソサイエティの別名)を経て、平成7年度からソサイエティ制に移行しました。因みにソサイエティ制検討当時の会員数などを見てみると、図3に示すように順調な増加傾向にあった時代でありました。

本来のソサイエティ制では、各ソサイエティの自由な活動とそれに伴う財政の独立採算制を実施する計画でしたが、慎重を期して、制度的には各ソサイエティ毎の独立運営を強めながらも、財政的には学会全体で考えるという経過措置が採られ、ソサイエティ独立採算制が始まったのは漸く昨年度のことからになります。

ソサイエティ制検討の際から、基礎・境界ソサイエティは電子情報通信学会の中の謂わば『中央研究所』としての役割を担うソサイエティということで、その基本理念は自由な研究の発揚とその発表の場を提供し、電子情報通信の基礎・境界分野の学問の発展に寄与すること、とされて参りました。この基本理念は現在でも、あるいは動きの激しくなった現在において尚更のこと、その考え方は正しく、基礎・境界ソサイエティが基本理念として掲げていくべき旗印と考えます。

昨今問題になっている耐震強度の例を挙げるまでもなく、基礎がしっかりしていなければ、少しの揺れにも全体がぐらぐらしてしまいかねません。近年、企業の業績ばかりでなく教育面にも及ぶような短期の成果主義が幅をきかせている状況には少な

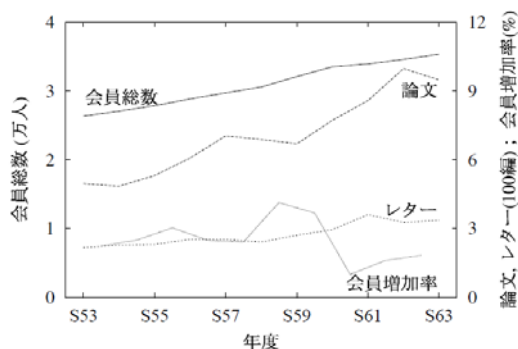


図3: ソサイエティ制検討の頃の会員数

からず心配の念を禁じ得ません。この辺りの私見につきましては、電子情報通信学会誌7月号の小特集(エレクトロニクス、情報通信、情報・システム系学生へのメッセージ)に『Study ABC』と題する駄文を書かせて頂きましたので、もしご興味があればご覧頂けたらと思います。

4. ソサイエティ独立採算制と活性化基金

上にも書きましたように、昨年度から始まった独立採算制の実施は、ソサイエティにとって大きな環境の変化です。ソサイエティ独自の自由な企画や施策の実施を許す代わりに財政面も自分で責任を持ちましょう、ということです。勿論、現状から『滑らか』に移行することになりますから突然何かがひっくり返ってしまうような心配までする必要はありません。論文誌電子化の経済効果も期待され、むしろ活性化のために必要な資金を有効に活用していく方策を考案していくことが肝要と考えられます。

基礎・境界ソサイエティでは『活性化WG』において検討を重ね、ソサイエティの活性化に資するために資金的な援助をする『活性化活動費(仮称)』

の制度を本年度よりスタートし、皆様に有効に利用して頂くことを始めました。『活性化 WG』での検討は今後も継続的に行なわれる予定で、いずれ続く方策も提案頂けるものと考えております。

5. ソサイエティ会員からの意見の収集

本ソサイエティが独自の施策や企画を行なっていくに当たっては、広く一般会員の意見や提案を取り入れていくことが出来れば、と考えます。例えば専用のメールアカウントを用意する等のことが出来れば、そのような意見収集システムは比較的簡単に実現出来るような気が致します。これによって、ソサイエティ会員諸氏からの声が運営委員会に直接届き、一体感が増して基礎・境界ソサイエティへの帰属意識を高く持って頂けるようになれば、と期待する次第です。これについては次の運営委員会でご相談させて頂けたらと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

6. むすび

挨拶と何とかは長過ぎてはいけない、という箴言(?)に反して、少々長い挨拶になってしまいました。残念ながら、これは僕の中で何を申し上げるべきか、はっきり整理が出来ていないという事実の反映に過ぎず、甚だ申し訳ない限りです。

幸い、次期ソサイエティ会長には長らくソサイエティ副会長(事業担当)として活性化WGの主査を務められた大石進一先生が就任されています。その意味で来年度に関しては心配はありません。今年度は来年度へ向けて『解析接続』が出来るような形で進めることが出来ればひとまずお許しが頂けるのではないかと考えております。皆様のご協力とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

ニューズレター投稿のご案内

本ニューズレターは、基礎・境界ソサイエティ会員の皆様からのご投稿をお待ちしています。各号の**投稿締切日 (*)**までに、テキストファイル(*.txt など)、画像ファイル(*.jpg など)を tetsuva.sakai@toshiba.co.jp (酒井 哲也：ソサイエティ誌担当幹事)までお送りください。

投稿内容の例：

- ・ 論文募集・会議開催案内
- ・ 会議参加報告
- ・ 研究会紹介・活動報告
- ・ その他、基礎・境界ソサイエティに対するご意見など

今後の発行スケジュール

	投稿締切日 (*)	発行日
No.59:	2006/09/22	2006/11/01
No.60:	2006/12/08	2007/02/01
No.61:	2007/02/23	2007/04/01